

● 本会の動き ●

☆平成25年度部会活動功労賞(部会CT賞)☆

[部会CT賞表彰にあたって](増田隆夫 部会CT長)

化学工学の学問は医農薬製造、化学産業、金属精錬、材料製造、エネルギー等に留まらず熱・物質移動、物質変換、システム設計などをともなう全ての分野で必須となっています。そして、社会と産業の動向にあわせて、基盤となる学理からプロセス開発まで研究者が活動する分野が多岐に亘り細分化されてきました。そこで、化学工学会では、関連する分野について専門家のコミュニティーを形成して情報の共有化と連携を進めることで研究活動をより効率化するため、平成14年より部会制が導入されました。本年で11年が経過し、14部会が設立されて化学工学会の様々な学会活動を支えています。また、各部会が対象とする分野は広いいため、その細分化に対応すべく部会内に複数の分科会が立ち上がっています。部会や分科会は独自、あるいは他部会も含めていくつかの分科会と共同して、国際会議や秋季大会のシンポジウム、講習会あるいは講演会を企画・運営・開催することで、産学官の研究者・技術者の情報交換や教育の場が提供されています。これら部会の活動は部会員の皆様の努力により支えられておりますが、特に若手会員の不断の貢献に因るところ大なるものがあります。この貢献に少しでも報いるべく平成22年より部会活動功労賞として部会CT賞が設けられました。

今回は4回目の表彰となりますが、企画、運営などの部会活動の活性化に大きく貢献された以下の2名の方を受賞者として選ぶことができました。受賞者の海外渡航などの関係で平成26年3月に岐阜大学で開催されました年会において、推薦母体の部会総会で表彰が行われました。受賞者のこれまでの献身的な貢献に感謝するとともに、今後も部会を始め化学工学会の活動にご支援いただきたくお願い申し上げます。

この度、受賞されました2名の方に心よりお祝い申し上げます。

1) 題目：「基礎物性部会事務局としての献身的活動、ならびに熱物性測定技術の公開と国際会議・MTMS12への顕著な貢献」

春木 将司氏(基礎物性部会)

春木氏は、平成22年度、23年度の2年間、基礎物性部会の事務局担当として庶務、会計、ホームページ担当を務め、24年度、25年度はホームページ担当を継続して務めています。その間、同氏は円滑な部会運営やホームページの適切な管理・迅速な情報公開等に尽力されたことに加え、以下の3点において、特に顕著な実績を上げ、当部会の発展に大きく貢献されました。

①部会員が保有する熱物性測定技術を広く公開するプロジェクト

を推進した。

②当部会ならびに超臨界流体部会主催の国際会議である「6th International Symposium on Molecular Thermodynamics and Molecular Simulation (MTMS12)」の事務局担当として、会議の成功に尽力した。

③会員同士の交流を深める行事の企画を率先して行った。

まず①については、かねてより当部会の課題として挙げられていた、部会と産業界との結びつきの強化、ならびに会員増強を達成することを目的として、平成23年度に同氏が中心となり部会員が保有する熱物性技術の公開プロジェクトを実施されました。同氏は、当プロジェクトに関する部会員からの意見集約、技術情報収集、公開方法の立案ならびにホームページの整備を迅速に行い、平成23年12月より部会ホームページに「物性測定情報」として公開されました。本ページには、技術を保有する研究室、測定方法や必要なサンプル量、測定時間等の詳細情報が掲載され、熱物性測定法やデータを必要としている研究者・技術者が「この熱物性データの情報を得るためには、まず、どこに連絡をすれば良いか?」が一目で分かるようになっており、共同研究や受託研究の道標的役割を果たしています。さらに今後、部会員がこのページをさまざまな場所でアピールし、当部会の実力を広く知ってもらうことによって会員増加が期待できます。したがって、本プロジェクトの成果が当部会のアクティビティー向上に果たす役割は非常に大きいといえます。

次に②について、基礎物性部会主催事業であるMTMSは、3年毎に日本において当部会員が中心となり開催される熱物性と分子シミュレーションをトピックとした国際会議です。6回目の開催に当たるMTMS12は平成24年9月25～28日に東広島市で開催されました。同氏は事務局担当として、ホームページの作成、予算管理、物品・飲食業者との折衝、アルバイト学生の配置と指導ならびに参加者への連絡窓口等の学会運営庶務全般において中心的役割を果たされました。まず、本会議のホームページについては、予算を有効に活用するために外注とはせず、同氏が一から作成されました。参加者への連絡事項、プログラム、交通案内等がタイムリーに掲載され、参加者の見やすさ・情報の得やすさに十分配慮された充実したホームページでした。また、要旨集やプロシーディングス等の学会グッズの手配や昼食などの飲食業者との折衝では、非常に煩雑な業務であるにもかかわらず、完璧にやり遂げられました。さらに特筆すべきは、習慣・文化の大きく異なる様々な国(アメリカ2名、オランダ1名、デンマーク1名、ドイツ1名、トルコ1名、アラブ首長国連邦1名、インド2名、インドネシア1名、中国6名、韓国5名)の招待・一般参加者から寄せられた多くの要望に対して、同氏は非常に丁寧に対応されました。すなわち、問い合わせのメールに対する迅速、且つ、丁寧な返答、広島空港・ホテル、ホテル-学会会場への送迎の手配・スケジューリング等を行われました。都市圏に比べ利便性に劣る地方都市における国際会議開催において、外国人参加者が不自由を感じることなく本

会議に参加することができたと考えられます。同様の対応は日本人参加者にも為され、前回大会に比べ参加者は約70名から81名に、口頭発表は24件から27件、ポスター発表は25件から42件に大きく増加し、MTMSの国際会議としての地位を一段と向上させるとともに、本研究分野の外国人研究者に日本人研究者の深いホスピタリティを知ってもらうこととなりました。このことは、次回大会以降の円滑な運営に好影響を与えたことは間違いなく、同氏が当部会の国際交流関係事業に対して大変優れた影響を与えたと考えられます。

最後の③会員同士の交流の促進については、22年度までは、化学工学会の年会・秋季大会においても部会員同士の交流を深める行事は無かったが、同氏が事務局担当となった23年度から、年会と秋季大会時に懇親会を開催するようになりました。その結果、企業・大学の若手研究者や学生と、当部会の指導的役割を果たしているシニア部会員との交流が促進され、部会の活性につながっています。なお、本行事は同氏が事務局・庶務担当から離れた現在も継続して行われています。その結果、①で示した熱物性情報公開プロジェクトや②の国際学会運営も非常に円滑に遂行されました。また、学会誌への積極的な論文・レビュー記事の投稿なども行われるようになりました。

以上のように同氏は、部会の新しい事業の立ち上げや会員増強への貢献(①)、国際会議運営への貢献(②)、ならびに部会員交流の活性化(③)への貢献に対して、非常に優れた業績を挙げていることは、いずれの部会員の目から見ても明らかであり、また、今後の当部会発展にも大きく貢献してくれることが確信されます。

以上の理由により、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。



右：春木将司氏
左：増田隆夫部会CT長

2) 題目：「反応工学会／触媒反応工学分科会の広報活動（HPの管理・運営）における長期間におよぶ多大なる貢献、ならびに触媒反応工学分科会における会計業務を通じた顕著な貢献」

近江 靖則 氏（反応工学会）

近江氏には、ホームページ担当者としてのご貢献と、会計担当者としてのご貢献があります。

まず、ホームページ担当者と致しましては、反応工学会で平

成15年から現在まで10年間、触媒反応工学分科会では平成18年から現在まで7年間の長きにわたり従事され、ホームページの作成・維持・管理・運営を一手に担ってこられました。この間、部会／分科会の両活動をタイムリーに掲載するため、年間数十回もの更新を継続され、部会／分科会のアクティビティとその存在意義を広く世間に知らしめることで広報活動に大きな貢献をなされております。

反応工学会HP：<http://www2.scej.org/cre/>

触媒反応工学分科会HP：<http://www2.scej.org/cre/catalog/seminar.html>

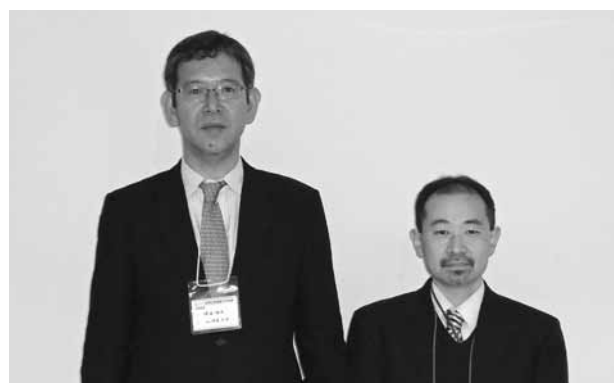
また、ホームページの海外対応（英文化）におかれましても、各分科会を取り纏め、部会全体の英文化を速やかに実施され、国内のみならず海外に向けての広報活動にも貢献されております。

二つ目の理由である会計担当者としてのご貢献ですが、同氏は触媒反応工学分科会の会計担当幹事として平成20年から4年間従事され、分科会の会計管理並びに報告書のご作成・ご報告をなされるとともに、会計上の健全な運営に大きく貢献されておりました。

例えば、これは化学工学会全体の問題でもあります。触媒反応工学分科会においても賛助会員の減少が深刻な問題となっており、会員減少により収入が縮小する中、分科会の活動のレベルは維持しなければならないために会計上は赤字が続いておりました。同氏は斯様な状況に問題意識を強く持たれ、改善案として毎年比較的大きな支出要因となっていた「劣化報告書（年一回開催される『劣化セミナー』を取り纏めた報告書で、年度末に作成して賛助会員に無料配布されるもの）」について、印刷物配布から電子ファイル配布への変更をご提案されました。更に、ご自身が劣化報告書作成のご担当者であったことから、自らが電子ファイル化の作業を実施されることでコスト削減を貫かれ、最終的に大きな支出削減を達成され、昨年度からは赤字を解消するに至りました。

同氏は本来の大学での業務があるにもかかわらず、部会／分科会のホームページ管理・運営業務と分科会の会計業務を並行してご担当され、それぞれにおける地道で継続的なご尽力は高く評価されるものであります。またその成果も部会／分科会の活動において重要かつ大きな貢献がございました。

以上の理由により、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。



右：近江靖則氏
左：増田隆夫部会CT長